歌川国芳の水滸伝絵画と漢籍について

鄔松林（神戸大学）

歌川国芳による水滸伝を主題とする作品（以下、水滸伝絵画とする）において、作品の題名に刻まれた豪傑の渾名と小説における渾名が一致しないことがある。先行研究では刻み違いとされているが、その根拠は指摘されていない。佐々木俊守氏が、「国芳が模した水滸伝画像」で、先行研究に基づき、国芳が他の作品を参考にした可能性を主張している。しかし、底本に関する考証は未だ行われていない。本論では国芳による水滸伝絵画の全シリーズにおいて、渾名と小説が不一致である例を対象とし、国芳が水滸伝絵画を制作するにあたって参考にした可能性の高い一次資料を考察する。

まず、国芳の水滸伝絵画における豪傑の渾名と小説が一致しない人物は、阮小五、李俊、張順という三つの例があげられる。以上の豪傑の渾名を国芳のシリーズ中「百八人之一個」、「水滸伝豪傑百八人」において比較すると、張順の渾名は江戸時代に最も手に入れやすい金本『水滸伝』と著しく異なっている。そのため、国芳による渾名の改変は単なる刻み違いではないと考えられる。

次に、国芳は「百八人一個」、「水滸伝豪傑百八人」の両シリーズを制作する際に陸謙「天罡地煞図」を参照した。しかし、国芳の作品と「天罡地煞図」とでは渾名の表記が異なっている作品がある。「天罡地煞図」におけるそれらの渾名と国芳の表現を比べ、渾名の字が近い豪傑は造形表現も類似していることがわかる。以上で、「水滸伝豪傑百八人」における渾名については、「百八人一個」、「天罡地煞図」の影響が考えられる。さらに、国芳の水滸伝絵画の制作時期から考えると、国芳は「水滸伝豪傑百八人」を制作する際に「百八人一個」の渾名を受け継ぐと同時に、「天罡地煞図」の渾名を照らし合わせながら誤字を直した可能性が指摘される。

そして、『玄同放言』では、琴嶺が模した中国原本の戴宗と武松の挿図が確認できる。馬琴はその戴宗像の原本に関して『玄同放言』に「順治雍正二本なる繡像は郎瑛が序したる画像の摹本なり」という記録があり、雍正本の存在が言及されている。さらに、雍正本の三つの版を比較すると、馬琴が言及している雍正本とは懐徳堂刊本ではないかと推測される。このことから、琴嶺の原本では『宋江三十六人賛』、酔耕堂本、懐徳堂本を同じ流れに属することが明らかである。最後に、『玄同放言』では、馬琴は郎瑛が序文を記した横巻肉筆画が『水滸伝』でなく、周密の『葵辛杂職』の続集に記録されている『宋江三十六人賛』であることが指摘されている。そのため、国芳は馬琴を通じて『宋江三十六人賛』の渾名を参考にした可能性が考えられる。また、『水滸伝』が出版された事情や、日本で流布した状況から、国芳による渾名の改変は、建本あるいは福建省の近隣地方の出版元により出版され、日本に流入した中国小説の表現に由来する可能性が指摘できる。